

『他力信仰録』より

2 疑いなき本願

私は威神功德不可思議の此の大宝海に浴する迄は 学問をして名僧知識に成る決心でいたけれども、自分一人の名誉を荷負うよりも一切の群生を生かさねばならないから一生を布教に終らなければならない。 武士が戦場で斃れる様に 僧侶に成った以上は 高座が死に場所でなければならない。

世の中の多くの同行が哀れではないか。 真に信仰の告白を聞く事なく、生命懸けの真剣味を聞く事も出来ず、単に継子虐めや落語の出来損ないの様な話を聞いて満足していらるるが残念な事ではないか。 自信教人信で無くては 生きた宗教は弘まらない。 自信の

抜^ぬけた教^{きょう}人^{にん}信^{しん}は蓄^{ちく}音^{おん}機^きか、魂^{たましい}の抜^ぬけた人^{にん}形^{ぎよう}の様^{よう}なものだ。人^{ひと}の前^{まえ}では人^{ひと}に操^{あやつ}られて音^{おと}を立て^た

るが独^{ひと}りでいては慶^{よろこ}べないだろうが、信^{しん}仰^{こう}は僧^{そう}侶^{りょ}だけ易^{やす}く得^えられる特^{とつ}権^{けん}では無^ない。道^{どう}俗^{ぞく}

共^{とも}に真^{しん}剣^{けん}で無^なければ他^た力^{りき}不^ふ思^し議^ぎの妙^{みょう}味^みは得^えられない。信^{しん}樂^ぎ開^{よう}発^{かい}と胸^{むね}に贅^{たなび}いていた疑^ぎ雲^{うん}が晴^は

れた自^じ覚^{かく}があるか。明^み信^{よう}仏^{しん}智^{ぶつ}と親^{おや}に遇^あうた体^{たい}験^{けん}があつたか。真^{しん}実^{じつ}功^く徳^{とく}大^{だい}宝^{ほう}海^{かい}を無^む条^{じょう}件^{けん}で譲^{ゆず}

り受^うけ 広^{こう}大^{だい}難^{なん}思^しの慶^{きょう}心^{しん}に驚^{おどろ}かされた時^{とき}があつたか。頭^ず燃^{ねん}を払^{はら}うが如^{ごと}く生^{いの}命^{のち}懸^がけで求^{もと}めた

事^{こと}があつたか。此^この心^{しん}深^{じん}信^{しん}せること由^{なお}し金^{こん}剛^{ごう}の如^{ごと}しと 如^{にょ}来^{らい}の不^ふ可^か思^し議^ぎ力^{りき}に貫^{つらぬ}かれた境^{きやう}地^ち

に立^たった事^{こと}があつたか。疑^{うたが}い無^なく墮^おちるのは私^{わたし}一人であつたかと地^じ団^{だん}駄^だ踏^ふんで泣^ないた事^{こと}が

あつたか。疑^{うたが}い無^なく助^{たす}かるは私^{わたし}一人であつたかと躍^{おど}り上^あがって喜^{よろこ}んだ事^{こと}があつたか。

乃^{ない}至^{しい}一^{いち}念^{ねん}も疑^ぎ心^{しん}ある事^{こと}なしと 名^{めい}刀^{とう}で乱^{らん}麻^まを截^たった真^{しん}仮^けの水^{みづ}際^{ぎわ}が立^たった覚^{おぼ}えがあつたか。

今^{いま}こそ明^{あき}らかに知^しられたりと 往^{おう}生^{じよう}の一^{いち}大^{だい}事^じに夜^よが明^あけた気^き持^もちに成^なったか。右^{みぎ}の様^{よう}な

自^じ信^{しん}自^じ覚^{かく}更^{さら}に無^なく、他^た力^{りき}だから凡^{ぼん}夫^ぶに判^{わか}る筈^{はず}が無^ないとか、凡^{ぼん}夫^ぶにはっきりした事^{こと}は無^ないと

か、水際角目はなく何時とはなしに得らるるのだ、死んで後の往生であるのに此の世に往生が有ってたまるかとか、説教本の真似をして自分に無いから人にも無い様に教えている人が有りとすれば、浄土真宗は死物になるではないか。

畢竟ずるに言葉だけを得て親心を失ってはいないか。他力の言葉に馴れて他力不思議を受得する事を忘れてはいないか。其の儘の言葉に甘えて遣る瀬の無い念力を反古にしてはいないか。立所に他力撰生の旨趣を受得せりの自力浄尽の叫び声は何時とは無しに知らぬ間に毛穴から入る様な信念ではないぞ。仏が知っていて凡夫が知らないのなら仏凡一体ではないではないか。明らかな親に逢うて明らかに成れない位なら聞いた所詮はないではないか。地獄は一定住み家ぞかしの地獄に堕ちた自覚が無いから、五劫思惟の本願は私一人の為であつたか、と言う極楽一定の体験が無いのだ。自分の五兆の願行であるのに死後迄長綱取る必要が有るものか。文句の言える今、正定聚不退の大自然を獲なくては親が泣く

ぞ。

醒めよく、道俗共に絵に書いた餅を弄んでいたのでは お腹は膨れないぞ。盲人が

盲人を導いては大道は歩けない。

体験の無い人が群生を導いたのでは無碍の白道は歩かれ

ない。善悪を超越し、倫理道德を超越して 而も一切を抱擁し一切に合掌し得る境地に迄

進まねばならない。

尊いではないか

南無阿弥陀仏、

嬉しいではないか

南無阿弥陀仏、

業流転を続けているありったけが

願力の白道を歩んでいるとは思議ではないか。一切

一切

有情は言うに及ばず、山川草木悉くが私一人を生かす為に莊嚴されて有ったのか。

合掌

せずにはいられない。

宇宙全体を唯で戴いた広大無辺の信念を

御同朋、御同行に知らし

て上げなければならない。

一 信心戴いて行かねば往生は不定である。其の信心とは 多くの方は堕ちる者をお助けと

信じたのが信心だと言う。

言葉の上は微塵も違いは無いが、堕ちる者とお助けとの中間

連鎖を信心の様に心得てはいないか。

堕ちる者とお助けと機法合体しているから、法を

見れば助かりそうな、機を見れば堕ちそうな、不徹底極まる信仰で、機を見ると手間がか

かるから法を見よと、強請る機には蓋をして、気持のよい物を教えて信仰の慰みにしては

いないか。機を見切らない者は如実の法は知らない。一体と言え、堕ちる衆生と助

ける親とが融合した時であって 私が弥陀やら弥陀が私やらの境地であり、如実の法に照

されて罪業深重の魂の往生の望みの切れた時、堕ちるも参るも知り切らない心じやと親が

信じ切っているぞーの勅命に大満足した時を 機法一体とも言い、他力至極の金剛心を得

たとも言っているのであって、親の信じ切ってくれた事を信ずるのが他力の信仰である。人に

習って「ふーんそうかい」と合点したのは 信じたのでは無く知った分際である。此処の

体験の妙味は 如何なる名僧知識でも筆授も出来ねば口伝も出来ない。親は親、子は子、

し し し し

みち もと

によらいによじつ

ねんりき ふ

ほか みち

師は師、資は資、一人くが道を求めて 如来如実の念力に触れるより他に道はない。

親の誠おや まことに打ち明う あかされた開発かいほつの世界せかいは 親子おやこ、兄弟きょうだい、師資しし、朋友ほうゆう、平等びやうどう一味いちみの妙諦みやうたいである。

二 有難ありがたい物を握にぎって 之これだけ喜よろこばれるから往生おうじようが出来できるだろうと考かんがえている人ひとが多いが、

之これだけとかあれだけとか自分じぶんの喜よろこびに眼めの付つく間あいだは真剣しんけんではない。未だ真実しんじつの機きが知しられ

ていない。自分じぶんは如実によじつに喜よろこび得うる機きか、清浄しやうじやうの心こころを保たもち得うる機きか、散乱さんらんの心こころを纏まとめて一心いっしん

に成なり得うる機きか、自分じぶんを知らない人ひとはいざ知しらず、現在げんざいに苦惱くのうの無ない人ひとは兎とに角かくとして、

火宅無常かたくむじやうの世界せかいに煩惱熾盛ぼんのうしじやうの業火ごうかを燃もやしつつある事ことを痛感つうかんし、大火充満だいかじゅうまんの世界せかいをも切きり

抜ぬけて大決定心だいけつじやうしんを獲えようとする勇猛精進ゆうみじやうしやうじんの求道者きゆうどうしやなれば、必ず空言囃事かなら そらごとたわごとの誠まことなき世界せかいに驚おどろ

き、苦逼失念くひつしつねんの自分じぶんに懼おそれるであらう。何処どこに誠まことが有あるか。何処どこに真実しんじつが有あるか。動かぬ

誠まことは妄念もうねんではないか。この妄念もうねんに心得振こころえぶりや喜よろこび振ぶりの錦にしきを着きせても 往生おうじようの瀬戸際せとぎわには

ぬ

すえ とお

せつな

むけん

ぞこめ

はし

もうねん

だれ

脱がねばならない。末は通らない。刹那　　に無間のどん底目がけて走る妄念は誰に

遠慮も容赦も無く、学者は学問持った儘、智者は智慧を持った儘、きりきり舞いして墮ち

るのである。私の総ては間に合わない!!　（と口でも無ければ意でもない、それなら

何？　所謂非意業の意業である）と自力疑心の糸の截たれた時、六字の世界は展開されて

いるのである。あツとも、すツとも言えない境地、取ったのやら取られたのやら　何一

つとして執持し得ない私の儘が　御親の念力に摂取された事を信ぜずにはいられないので

あつた。

三　疑われない様にして参ろうとする同行は多いけれども　疑いなく救われた同行が尠い。

自分の方から疑われない様に敬遠主義を取っているのは殊勝な様であつても　他人行儀で

遠慮が多い。

疑つた後でなければ晴れた妙味は判らないではないか。

それを初めから

素直らしう自分が粧い、仏様の広大な慈悲を疑うて何にするかと言っているけれども、疑うまいと疑うているのであって、疑わないのでは無く、疑うて見る迄の真剣さに成つていないのである。第十八願の不可称不可説不可思議の信樂を獲得し 現生不退の

勝益を受得する迄は 疑うとか疑わないとか、信じたとか、喜ばれるとか言うのは悉く、雑行雑修自力の心へ毛の生えた不了仏智の信仰である。凡夫が疑うとか疑わないとか

文句が言えるものか。法は疑わんが機を見ればどうもと言う人が十中八九であるけれど

も、機法一体の南無阿弥陀仏の阿弥陀仏は信じるけれども、南無は信じないと言うのと同様ではないか。機が助かっている事を信じ切らないのは 法の威人力を疑うている

証拠ではないか。矛盾した信仰で生死の大海が乗り切れるものか。親が知っていても子供が知らなければ 機法一体とは言えないではないか。信仰を最少し積極的に大胆に疑う

余地の無く成る迄進め!!

聞いて聞いて聞き抜け。疑うて疑うて疑い抜け。矢でも石を貫くではないか。水でも

穴を穿つではないか。

居眠り半分で聞く他力ではないぞ。

他力に成る迄他力を聞け。

一代諸教の信よりも

弘願の信楽なほかたし

難中之難と説き給ひ

無過斯難と述べ給ふ

凡夫が仏に成る早業を聞き得る事は 三千世界を荷負うよりも難しいぞ。

自惚強い

凡夫が自分自身を知る事が難しいからである。

口では堕ちる者と言っているけれども

現在生死の苦海に堕ちて泣いた事があるか。

火花を散らして求めた事があるか。

決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫（現在）

曠劫より以来常に没し常に流転して

（過去）出離の縁有ることなし（未来）と深信す、と。

自身は現に是れ煩惱を具足せる凡夫善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知

すと言う切迫った三定死の立場に立った事が有ったか。此の血を吐く真実のお言葉を

同行は何と聞いているか。但だお言葉として聞いてはいないか。知ったのを信じたのと

心得てはいないか。善導大師御開山聖人様達を身替り位に心得てはいないか。親の

信心が子に譲れないのだから、聖人様の信仰も私には譲れないのだ。真剣に求め抜けば

平等の証は開かれる。求めて求めて求め抜いた時、決定必定、必墮無間!!と真実の魂

即ち妄念が白状さされた時にこそ、同時に動く感謝の心こそ「自身は是れ煩惱を具足

せる凡夫善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知す。今弥陀の本弘誓願は名号

を称すること下至十声一声等に及ぶまで定んで往生を得しむと信知して乃至一念も疑心

あることなし。故に深信と名づく」と仰せられてある。この乃至一念も疑心有ること無

しとは法の方にかかるのみの御言葉では有るまい。打っても叩いても、擦っても磨い

ても出離の縁有ること無き身こそ、乃至一念も疑う余地なく墮ちる!の大決定と、五兆の

願行を成就して生血を注いだ念力を十声一声等に至る者迄往生させずんば正覚を取らず

と叫び届けた一刹那の大白覚、乃至一念も疑う余地なく救われたと言う大決定は、両手

を打って音を出した様に同時即であつて、機と法とは同時に成立するのであつて 往生の

決定した時でなければ正覚は取らない、正覚を成就した時でなければ往生は決定しな

い、疑いなく堕ちた時で無ければ疑い無く助かつた時ではない、他力の信仰は疑わない様

にする信仰ではなく、疑い無く本願に救われた事を喜ぶ信仰である。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 称えずにはいられない。慶ばずにいられない。信前信後

はかくも鮮やかに水際が立っているとは知らなんだ。嗚呼不思議ではないか、極悪最下の

法龍が十方法界を唯で戴いたとは。嗚呼他力ではないか、真剣に成り得ない法龍が真剣

に成らずにはいられないとは。